

2013-2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 9月分

作成者：河上直子

作成日：2013 年 10 月 4 日

初めまして。2013 年度のフィンドレー大学福井県奨学生として、米国オハイオ州フィンドレー大学に留学させて頂いております、河上直子と申します。福井県奨学生としてこのような貴重な機会を頂けたことを非常に光栄に思っております。また、私の留学を支えてくださっている全ての方々への感謝を忘れずに、これから 1 年間、数多くのことを積極的に学んでいき、福井県の国際交流事業に貢献できればと思っております。

9 ヶ月間のこの報告書を通じて、皆様にアメリカでの生活をお伝えすると共に、この奨学生制度に興味を持って頂ければと思います



【フィンドレーについて】

フィンドレー市は、米国オハイオ州の西北部に位置しており、最寄りのトレド空港からは車で 40 分ほどのところにあります。人口は約 4 万人の、緑豊かでのどかな街です。1880 年代に石油と天然ガスの産出によってフィンドレー市が栄えたことから、石油がこの街と大学のシンボルマークになっており、この街の至るところで散見されます。フィンドレー大学の学生が **Oilers** と呼称されるのも、そのためであると納得させられました。



【フィンドレーでの生活について】

驚いたのが、ほとんどの学生がキャンパスの周辺に住んでいることです。これは日本の大学との大きな違いだと感じました。こちらで暮らすには、学寮または一軒家を何人かでシェアするグループハウスの 2 つがあるのですが、私はグループハウスを選び、日本人 5 人・アメリカ人 4 人と暮らし

ています。週末は皆で料理を作ったり、遠くに出かけたりと、賑やかに暮らしています。キャンパス内にあるので教室までも近く、安全面から見てもとてもよい環境だと思います。

【授業について】

フィンドレー大学でのコースは、様々な国からの留学生と共に英語を学ぶ IELP(集中英語コース)と、ネイティブの学生に混ざり様々な分野の授業を受ける Undergraduate(学部生)との二つに分けられます。私は、今回の秋学期は IELP で学んでおり、リーディング・リスニング・コミュニケーション・コンポジション・日本語の 5 つを履修しています。日本の大学とは異なり、一週間に同じ授業が何回もあるので、その分宿題に苦労しますが、先生方が非常に熱心であったり、学生も積極的に授業に参加したりしている姿に、私も負けていけないと切磋琢磨する日々です。



【1ヶ月半を振り返って】

8 月半ばにこちらに到着してからは、新入生オリエンテーションに始まり、授業や課外活動など、本当に慌ただしい毎日でした。しかし、日本では経験することの少なかったボランティア活動やディスカッションなどに参加し、素晴らしく充実した毎日を過ごしております。様々なところに出かけ、初めてのもの、人に触れていく中で多くのことを学ぶことができました。また、アメリカに来てから、「積極性」が私の課題になりました。「やってみる？」という機会をいただいたら、それを逃さないこと。これが大切だと日々感じております。

作成者：河上直子

作成日：2013年11月3日

皆様、こんにちは。フィンドレーに来て2ヶ月半が経ちました。涼しい夏もすっかり終わり、朝晩は冷え込むようになって冬の訪れを感じています。10月は9月以上に様々なイベントがあり、さまざまな活動が本格化していく毎日でした。その中でも、英語落語、秋休み、Service Ambassador Program、博物館ツアー、Halloween Paradeの5つを紹介させていただきます。

【英語落語について】



10月初旬に、フィンドレー大学の日本語プログラムの一貫で英語落語に触れる機会がありました。講師として、日本やアメリカ、ニュージーランドで英語落語をされている落語家の笑人(しょうと)さんという方にお越しいただき、落語のいろはを教えてくださいました。笑人さんはとても朗らかな方で、私たちにひとつひとつ丁寧に教えてくださいました。英語落語というと難しいというイメージを持っていましたが、英語落語はごく簡単な単語で、それも言葉ではなくニュアンスを伝えるものであるため、アメリカ人の学生にも理解しやすいものでした。後日発表会があり、人前で披露する恥ずかしさや不安もありましたが、笑人さんに表現の仕方や気持ちの込め方など、手取り足取り教えてください、形にすることができました。

英語落語を習って、他の人が出来ないようなことができるということは非常に大きなアドバンテージだということを改めて感じました。まさに、「芸は身を助ける」ということです。笑人さんから教わった英語落語のように、私の財産と言えるものをアメリカ生活で沢山作っていこうと思いました。

【秋休みについて】

4日間の秋休みを利用して、ハウスメイトたちとナイアガラの水fallsに行ってきました。車で片道8時間の長旅でしたが、ナイアガラの水fallsはとにかく雄大で圧巻でした。レインボーブリッジを歩いて渡り、アメリカ・カナダ間の国境を越えたのもいい思い出です。秋休みが終われば後期の折り返しに入ります。今後とも一層頑張ろうと思ひ直すことができ、いい切り替えになりました。



【Service Ambassador Program について】



アメリカ人学生と私たち留學生がペアになってボランティア活動をする、Service Ambassador Programの活動で、毎週木曜日に老人ホームでボランティア活動をしています。お年寄りの英語を聞き取ることはまた少し違って難しく、私の英語もなかなか通じないことも多いのですが、毎回めげずに、興味を持ってもらえそうな内容を考えて取り組んでいます。

10月は生け花やお花見、折り紙について紹介しました。11月からも引き続き取り組んでいきたいです。

【博物館ツアー】

フィンドレー大学の異文化理解活動の一貫として開催された博物館ツアーに参加しました。今回は、シンシナティにある National Underground Railroad Freedom Center とミシガンにある Holocaust Memorial Center との二つに行きました。Underground railroad とは、南北戦争の際に奴隷がひっそりと亡命することを手助けした組織や逃亡路のことを指します。シンシナティは、奴隷州と自由州の境目であり、黒人奴隷を北部に逃がす重要な拠点であったそうです。発展途上国で行われている子どもの強制労働や搾取も奴隷の一部であると紹介されている展示物を見て、奴隷問題が過去の問題ではないのだと認識が改まりました。

また、Holocaust Center では第二次世界大戦を中心としたユダヤ人の文化や

歴史を学びました。印象的だったのは、ユダヤ人が収容所へ連れて行かれる際に使われた本物の列車が展示されていたことです。窓もトイレもない簡素な木造列車で収容所まで連れて行かれたおじいさんの経験談を聞き、人種の違いだけでここまで酷い扱いを受けたという事実に、胸が締め付けられる思いでした。



Underground Railroad Center から。橋の向こうはケンタッキー州と、確かに境目でした。

【Halloween Parade について】



私の所属している日本文化クラブの活動で、ハロウィンパレードに参加しました。仮装し、JAPAN と書かれた旗を携えて、道路の両脇に溢れんばかりに並んだ子供たちにお菓子を配りながら歩きました。近くのスーパーでは8月の下旬からハロウィン商品を取り扱うほどで、10月に入ると大学はもちろん街中でくり抜かれたパンプキンやハロウィンの飾りを見ることができるなど、

アメリカではハロウィンが重要視されているのだということを強く実感しました。

作成者：河上直子

作成日：2013 年 12 月 1 日

【Funday Sunday について】

Funday Sunday という地域の子どもたちとの交流会で、日本のコーナーを担当しました。このイベントは、フィンドレー大学内にあるマーザミュージアムで毎月開かれているものです。今回のテーマは”Wild West”ということで、新聞紙でテンガロンハットとかぶとを作ることになりました。当日はたくさんの方が足を運んでくれて、息つく暇もないほどの忙しさでしたが、達成感でいっぱいでした。テンガロンハットを折るのは、子どもには難しいのではないかと心配していましたが、大人も子どもも興味深そうに楽しみながら作ることができ、大成功だったと思います。



【Diwali Night について】

ディワリーとはインドの新年のことで、フィンドレー大学でもそのお祝いがされました。日本の大学でヒンディー語を学んでいたこともあり、インド人の友達にインドの民族衣装・サリーを着せてもらい、ディワリーナイトに参加しました。今まで知らなかったインドの伝統料理、民族衣装の着方、言語、舞踊など色々なものに触れることができました。異文化理解のためには、異文化に積極的に触れることが一番だと考えています。そのため、こういったイベントにはこれからも積極的に参加していこうと思いました。



【One World, Many Voices について】



留学生とアメリカ人学生の交流促進を図る、One World, Many Voices というイベントがあり、日本食を作る担当に立候補しました。お肉は避けようということでエビのあんかけを作り、好評だったのですが、留学生や、アメリカ人学生の中には、エビはもとよりシーフードが食べられないという人が1割ほどいたことに驚きました。初めてのエビに挑戦してみて、すごく美味しい！との声もいただき、単に慣れていないだけなのかとも思いましたが、同時に、皆に美味しく食べてもらえる日本食として何を作れば良かったか、という課題も見えてきました。こういう機会があれば、是非もう一度参加したいです。

【Thanksgiving break について】

アメリカでは11月の第4木曜日は **thanksgiving day** という祝日になっています。これは1620年にイギリスからアメリカに移住した人々が、大変厳しい冬をネイティブアメリカンの助けで生き延びることができたため、その感謝を表す目的で始まったと言われています。Thanksgiving day のため大学が5連休になったので、アメリカ人の友達の家滞りさせてもらいました。家では、各自が持ち寄った七面鳥の丸焼きやパンプキンパイ、マッシュポテトなど伝統的な **thanksgiving** の夕食をご馳走になりました。離れているところに住んでいる家族が集まって食卓を囲むという、アメリカの休日を満喫することができました。また、家族団らんの中にお邪魔した私を、初対面にも関わらず本当に温かく迎えていただき、感謝の気持ちでいっぱいでした。



2013-2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 12月分

作成者：河上直子

作成日：2014年1月3日

【Service Ambassador Program の振り返り】

10月から始まったボランティア活動も終わりを迎えました。12月の初旬に、それぞれ異なった施設でボランティア活動をしていたグループが集まって活動報告会をしました。Service Ambassador Program では、私が訪問していた老人ホームだけでなく、貧しい人々への食料配布や小学校訪問、動物と触れ合う活動など色々なものがあったことを知り、皆色々なことに挑戦して、困難を乗り越えたことを共有しました。今回の老人ホームへの訪問を通して得られた経験や友人は大きなものであり、春学期も引き続きこのプログラムに参加したいです。



【デトロイト総領事訪問】



12月9日に、今年新しく着任されたデトロイトの片山総領事がフィンドレー大学を訪問されました。片山総領事だけでなく、フェル学長や、フリード前学長をはじめ、副学長、学部長、市の経済開発局の方々にもお会いする貴重な機会となりました。写真は片山総領事です。片山総領事はとても気さくな方で、福井県とフィンドレー大学の交流が始まったきっかけに

ついて紹介したところ、とても興味深そうにお話を聞いてくださいました。福井県との奨学生制度を設立してくださったフリード前学長にもお会いし、直接お礼を申し上げることができました。今後もこのような素晴らしい制度が続いていくことを切に願っています。

【冬休みについて】

期末テストが終わると、3週間の冬休みがありました。4日間に及ぶ期末テストが終わるやいなや、アメリカ人の学生はさっそく実家に帰省していき、大学周辺は一気に人気なくなりました。私も、友人たちとフロリダ・ワシントンに旅行へ行きました。

フロリダのオーランド空港までは飛行機で2時間半



ほどですが、気候はフィンドレーのものとは天と地ほどの差がありました。時にはマイナス 10 度を軽く下回るフィンドレーに対し、オーランドは 12 月にも関わらず 30 度近くまでになります。常夏の気候のせいか、街の雰囲気もどこか開放的で、改めてアメリカの広さを感じました。訪れたケネディ宇宙センターでは、スペースシャトルの発射基地や組立工場の見学など、貴重な体験をすることができました。

それから、ワシントン D.C.を訪れました。ワシントン D.C.は、アメリカの首都、政治と歴史の中心地ということもあり、当然ながらオハイオともフロリダとも全く異なった厳かな雰囲気でした。ワシントンでは、ホワイトハウスを始めリンカーン記念堂、キング牧師記念碑、スミソニアン博物館や連邦議事堂など数多くの観光地を訪れました。中でも特に素晴らしいと思ったのはスミソニアン博物館です。ワシントン D.C.の多くの主要観光施設同様、入場料が無料であるという点に加え、スミソニアン博物館は非常に大規模なものでした。ナショナル・ギャラリー（国立美術館）、国立アメリカ歴史博物館や国立航空宇宙博物館に加え、産業・技術史に関する博物館やアメリカ・インディアン博物館などが連邦議事堂前の道路の両脇に配置されて、辺り一帯が広大なスミソニアン博物館地域となっており、とても一日や二日では回りきれない程でした。所蔵品も、目で見て楽しむ作品だけに留まらず、見て聞いて触って感じ取る作品が数多くあり、大人も子どもも楽しめる場所でした。



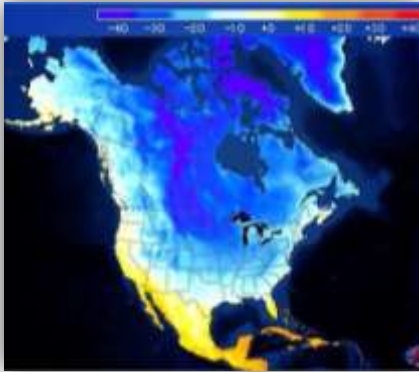
秋学期は、英語集中コースといえども初めてのアメリカの授業に戸惑うことも多くありましたが、ほとんど全ての授業で A をいただくことができました。また、勉強面以外でも多くの人に支えられてきました。春学期は力になってくれた人々に力を貸せる人になりたいです。春学期からは、学部で心理学・宗教学・美術などを新しく勉強することになっています。今までとは全く異なった環境になると思いますが、これまでより一層勉学に身を入れ、また同時に数多くのことに挑戦していきたいと思っています。

2013-2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 1月分

作成者：河上直子

作成日：2014年1月31日

【寒波について】



1月上旬に、アメリカ北東部を記録的な寒波が襲いました。大雪や厳しい冷え込み、強風に見舞われ、空の便を始め交通網が大きく乱れたほか、多くの政府機関や学校が閉鎖されるなどしました。ニューヨーク州とニュージャージー州では非常事態宣言が発表され、外出を控えるよう呼びかけられていました。もちろんフィンドレーも例外ではなく、6日から始まるはずだった春学期がなんと3日間の休校になりました。幸い、雪はそれほど降りませんでしたが、気温はマイナス27度まで下がり、体験したことのないような寒さで

した。アメリカ人のハウスメイトも、寒さの影響で学校が休みになるのは3年振りで、さらにこれほどの寒さは生まれて初めてだと驚いていました。寒さは1月の中旬に一旦は収まりましたが、月末にも再び寒波に襲われ、27、28日にかけて一部授業が休みになるなどしました。

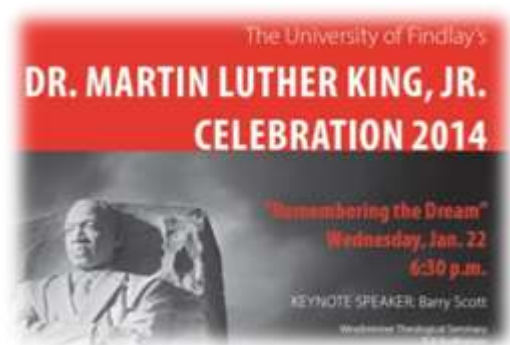
【トレド補習校での新年会について】

1月18日に、フィンドレーから車で1時間ほどのトレド市にある日本人学校で、新年会がありました。トレド補習校は、親の都合でアメリカに住むことになった子どもたちが、将来日本に帰国したときに日本の学校や習慣に順応できるようにするため、保護者が主体となって創設された、生徒数50名ほどの小さな学校です。今回初めてここを訪れましたが、先生と生徒との距離がとても近い、和気あいあいとした学校だなと感じました。新年会ではお餅をついたり折り紙やかるたなどで遊んだりしました。今学期からフィンドレー大学に来られた生徒さんとも、書き初めや竹馬などを通して親しくなることができました。



【Martin Luther King Jr. Day について】

アメリカでは、毎年1月の第3月曜日をマーティン・ルーサー・キング・ジュニアデーと定め、祝日にしています。「私には夢がある」という演説で有名なキング牧師は、黒人解放運動・公民権運動の指導者であり、その功績により今からちょうど50年前にノーベル平和賞を受賞しました。キング牧師は、アメリカの、特にアフリカ系アメリカ人に対する差別の歴史を語る上で重要な人物の一人となっています。フィンドレー大学でも、キング牧師を称える式典が開かれました。The American Negro Playwright Theatre の創始者であり、キング牧師の功績を伝える活動をされている Barry Scott さんをゲストスピーカーとしてお招きし、力強い講演を聞くことができました。また、先月ワシントンを訪れた際にキング牧師の記念碑を訪れたのですが、これは初の黒人大統領として、キング牧師の功績を称えたオバマ大統領によって2011年に建てられたものだと知りました。アメリカにおいて祝日が制定された故人は、他にクリストファー・コロンブス(10月第2月曜日)とジョージ・ワシントン、エイブラハム・リンカーン(大統領の日・2月第3月曜日)の3人しかおらず、ここからもキング牧師の偉大さをうかがうことができます。現在アメリカ国内において、少数民族に対する人種差別が無くなったと言うことはまだできませんが、キング牧師の活動により、法によって平和的に人種差別撤廃の動きを強めた意味は大きいといえます。



【トレド交響楽団について】

1月24日にフィンドレー大学内で、トレド交響楽団によるクラシックコンサートがありました。トレド交響楽団は今年設立70周年を迎える歴史ある楽団で、フェル学長やフリード前学長も参加されていました。今学期から始まった慣れない学部の授業に戸惑っていた私にとって、美しい音楽に触れることはとてもよい気分転換となりました。



フィンドレー大学の良いところのひとつとして、こういった余暇活動が充実していることが挙げられます。今回のクラシックコンサートだけでなく、コメディショーや、ジムでのダンス教室など、その内容は多岐に渡ります。新学期には新入生を歓迎するイベントがキャンパス中で毎日のように開かれていました。さらに、フィンドレー大学の学生であればこういった全てのイベントに無料で参加することができるのも非常に素晴らしいことだと思います。

私の留学生活も折り返しに入りました。今学期も、秋学期に引き続き様々なイベントに積極的に参加するつもりです。また、来月からいくつか新しい活動も始まります。詳しくは来月の報告書で紹介しますが、今学期は前期以上によく学びよく考える学期にしたいと思います。

作成者：河上直子

作成日：2014 年 2 月 28 日

【Groundhog Day について】

北米において毎年 2 月 2 日は、「Groundhog Day(グラウンドホッグデー)」と呼ばれる、Groundhog というリスのような動物の動きによって春の訪れを予想する日です。「グラウンドホッグは 2 月 2 日に冬眠から覚めるものの、外に出て自分の影を見ると驚いて巣穴に戻ってしまう」とされており、グラウンドホッグが巣穴から出る時に天気が曇っていれば春は間近で、晴れていれば、冬は 6 週間続くとされています。朝からニュースではこのイベントが話題になりましたが、厳寒と言われる 2014 年の結果は「冬はあと 6 週間続く」ということで、まだまだ寒い日が続きそうです。



【Black history month について】

アメリカでは今月は、奴隷解放宣言を発表したリンカーンと奴隷廃止活動家のフレデリック・ダグラスの誕生月であることから、黒人歴史月間となっています。フィンドレー大学内でも多くの映画鑑賞会や講演会、バスケットボール大会などが催されました。

2 月 15 日にはそのメインイベントである Black Tie Affair というダンスパーティーがありました。これは、男の人はスーツ・女の人はドレスを着て参加する、年に一度のフォーマルなダンスパーティーです。このパーティーを楽しみにしている学生も大勢おり、会場では、プロムドレスと呼ばれる長い丈のドレスから短い丈のものまで様々なドレスを見ることができました。学校で開催されるダンスイベントの類は、日本ではほとんどないのではないかと思います。また、ダンスだけでなく、パーティーの終わりには、学年ごとのキングとクイーンを決めるミスター・ミスコンテストのようなものもあり、大変賑やかなイベントでした。



【日本語ボランティアについて】

1月から、毎週1回の頻度で、今夏北海道の酪農学園大学に行かれる獣医学の教授に日本語を教えています。日本についてほとんどご存知ないということで、「おはようございます」などの挨拶から始めました。最初は、日常会話を教えるくらい簡単だろうと高をくくっていましたが、日本というものに全く触れたことのない方に日本語を教えるということは、私の想像をはるかに超える難しさがありました。

アメリカに来て分かったことですが、私は今まで、自分は高校生の頃アメリカに短期留学をし、大学でも国際系の学部には所属しているということもあり、外国の方々と触れ合う機会が多いように思い込んでいました。しかし、ここに大きな勘違いがありました。フィンドレーに来るまで、私が知っていた外国の方々は、ほとんどと言っていいほど日本語・日本文化をある程度知っている人たちばかりでした。しかしこちらに来てから、そうではない方々と知り合う機会が圧倒的に多く、これまで自分の視野がいかに狭かったか思い知りました。そのため、挨拶や自己紹介と言った日本語を紹介することももちろんですが、お札の種類や電車の乗り方など、ともすれば当たり前のように感じる日本独特のものを伝えることも必要だと思いました。そのため、何をどう教えたらよいかを考えて毎週取り組んでいます。

【元気キッズについて】

今期から、フィンドレー大学内で行われている「元気キッズ」というプログラムに、3人の日本人学生と1人のアメリカ人学生と共に参加しています。元気キッズとは、日本語に興味のある小学生の子どもたちが、週に2回、放課後にフィンドレー大学を訪れて、ゲームや歌を通じて楽しみながら日本語を学ぶプログラムです。子どもに教えるという初めての経験に、当初は緊張していましたが、子どもたちの元気の良さに圧倒され、緊張感など忘れ取り組んでいます。



幼い頃から異文化に触れるということはとても貴重なことだと思います。今回その貴重な経験を与える側として、週2回のこの時間を子どもたちにとって有意義なものにしたいと思います。また、4月には元気キッズの成果を発表する機会を二度いただいています。良いものが発表できるよう、子どもたちと精一杯頑張っていきたいです。

2013-2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 3 月分

作成者：河上直子

作成日：2014 年 3 月 31 日

3 月になり、フィンドレーの気候も少しずつですが暖かくなってきました。アメリカでは、3 月の第二日曜日から 11 月の第一日曜日の間、時間を 1 時間早めるサマータイムが採用されています。この日から、日本との時差が 14 時間から 13 時間に戻ります。ちなみに、日本ではサマータイムの名で知られていますが、アメリカでは Daylight Saving Time と呼びます。

また、3 月 17 日には聖パトリックスデーという祭日がありました。この日は、アイルランドにキリスト教を広めた聖人・聖パトリックの命日であり、シャムロックというクローバーのような植物が彼のシンボルであったことから、緑色の物を身につけてお祝いします。また、春の訪れを祝うという意味も込められているようで、アイルランド系であるなしに関わらず、この日は大勢の人が緑色の服や鞆を身につけていました。



【春休みについて】

3 月 1 日から 9 日間の春休みを利用してニューヨークへ行きました。今年の記録的な寒波の影響はまだニューヨークでも続いており、例年よりもかなり気温が低く、セントラルパークや街外れにはまだ雪が残っているほどでした。

滞在中は、3 つの美術館や 2 つのブロードウェイミュージカルを始めとする、さまざまなところに足を運ぶことができました。中でも印象的だったのが、2001 年の同時多発テロ事件の跡地にできた 911 メモリアルです。現在は新ワールドトレードセンターが建設中で、かつてツインタワーが建っていた場所は慰霊碑になっています。近くのトリビュートセンターでは遺品や手紙などが展示されており、映像を見ながら涙を流している方もおられました。高速で建設されていくビルやどんどん変わっていく活力的なニューヨークの町並みを見ている限りでは、ともすれば事件は過ぎ去ったかのように思えますが、人々の心の中にはまだ一生消えぬ傷として残



っています。ミュージカルやショッピングなどの、娯楽だけでないニューヨークを自分の目で見ることができ、本当に行ってよかったと思いました。

また、フィンドレー市では人口のほとんどが白人のため、アジア人は目立った存在でしたが、人種のサラダボウルと形容されるニューヨークでは全くそのようなことはありません。ニューヨークにいるさまざまな人々は、混ざり合わないながらも共存しており、改めてアメリカのダイバーシティを実感することができました。

【インタビューについて】

県の高校生を対象として、海外で学ぶことの魅力やフィンドレー大学について理解を深めてもらうことを目的として、埼玉県親善大使の方と協力し、2月から3月にかけて3名の方々にインタビューを行いました。その様子を簡単に紹介します。

まずインタビューを行なったのは、福井県との奨学金制度を立ち上げたフリード前学長です。前学長には、進駐軍の将校として福井県に滞在しておられた頃のことや、学長時代のことなどをお聞きしました。普段はあまり口数の多くないフリード前学長に多くのことを語っていただくことができて、とても嬉しかったです。

次の、フィンドレー大学初の女性学長であるフェル学長へのインタビューでは、海外で学ぶことや、学長自身の成功の秘訣をお聞きしました。学生時代のこともしっかりとお話してくださり、フェル学長のルーツに迫ったインタビューにすることができました。

最後に、フィンドレー大学の卒業生であり同市初の女性市長であるミハリク市長にインタビューをしました。大学時代のことや、二児の母であり同時に女性市長であることへの思いを中心に質問させていただきました。ミハリク市長はとても朗らかな方でインタビューは終始和やかな雰囲気になっていました。

インタビューを行う際には、その方のバックグラウンドから調べ、言うまでもなく質問内容もその方に応じて変えていかねばなりません。これらの作業を含め、インタビューをするということは想像以上に大変なものでした。現在はそれらの編集にあたっておりますが、私たちにしか伝えられないことを盛り込んだよいものができるよう尽力します。



2013-2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 4月分

作成者：河上直子

作成日：2014 年 4 月 30 日

はじめに、これまでフィンドレーでの留学生活をつづってきた私の留学報告書も、今回が最後となりました。今思えば、あっという間の 10 ヶ月間でした。今までお読みくださった皆様、本当にありがとうございました。

【International Night について】

大学内で、4 月 4 日にインターナショナルナイトが開かれました。これは、留学生が中心となって、各国の文化や食べ物を紹介する文化祭のようなものです。フィンドレー大学のイベントの中でも特に国際色溢れたものであり、今年は 11 か国が参加しました。

私たち日本からの留学生は、お揃いの T シャツを作り、自分たちで料理した炊き込みご飯と味噌汁を日本料理としてふるまいました。さらに、折り紙やけん玉、だるま落としなどの体験コーナーも設け、地域の子供たちなど学外の方々にも日本文化に触れていただきました。そして発表会では、きやりーぱみゅぱみゅやソーラン節、盆踊りなど、日本のポップミュージックと伝統的な舞踊との二種類をダンスで披露しました。どの国も素晴らしい発表で、会場全体がひとつになって各国のパフォーマンスを楽しみました。発表後は、「日本が一番良かった」とたくさんの方に褒めていただけて、1 ヶ月以上に及ぶ練習のかいがあったと皆で喜び合いました。



【元気キッズ発表会について】

上記のインターナショナルナイトと、4 月 6 日に Bowling Green 州立大学で行われたお花見で、元気キッズの発表会もさせていただきました。子どもたちが自分の名前と年齢、好きな色を日本語で紹介し、この日のために練習してきた、かえるの歌、チューリップ、大きな栗の木の下で、さよならソングの四曲を発表しました。大勢の観客の前でも臆することなく堂々と発表してくれて、非常に嬉しく思いました。

また、振り返ってみると、週に二回、子どもたちを集めて歌やダンスを教えることは非常に大変でした。子どもとあまり関わった経験がなく、さらに教師志望ではない私が軽い気持ちで参加した元気キッズは、時として思うように進まず、焦った時もありました。しかし、こうして発表を成功させることができて、達成感でいっぱいです。今秋の元気キッズの時期にはもう会えないということを子どもたちに伝えと、本当に残念がってくれるほど子ども達と打ち解けることができたことも、非常に嬉しく思いました。



【Easter(復活祭)について】

4月18日から21日は、イエス・キリストの復活を祝うイースターという休暇がありました。私は、ルームメイトの実家へお邪魔させていただきました。彼女の実家は、オハイオ州の州都・コロンバスにありフィンドレー市からは車で三時間ほどの距離にあります。ホームステイ中は、イースターエッグ(写真)を作ったり農場で乗馬をしたりしました。また、親戚が集まる場にも招いていただき、彼女のご家族と留学中の思い出話に花を咲かせるなど、充実した4日間でした。



【留学を振り返って】

私にとって海外での長期滞在はこれが初めてであり、当初は不安だらけでした。しかしこの期間で、様々な人・ものとの出会いがあり、またそれらの出会いどれもが非常に素晴らしいものでした。この留学をやり多量のものにできたのは、「積極的に何でもやってみることを」をモットーにものごとに取り組んだためだと思います。

アメリカで様々な考え方や価値観に出会い、多くのことを学んで、私自身も人間として確実に成長できたと感じます。このような貴重な機会をいただいて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この留学を支えてくださった全ての方々に今一度、感謝致します。本当にありがとうございました。帰国後は大学でさらに勉学に励み、自分の将来を見据えていきたいと思っています。今まで、本当にありがとうございました。

2013・2014 フィンドレー大学・福井県奨学生 奨学修了報告書

作成日：2014年5月15日

作成者：河上直子

2013年度フィンドレー大学・福井県奨学生の河上直子です。2013年8月から今年の5月にかけて、オハイオ州フィンドレー大学で多くのことを学ばせていただきました。私の留学を支えてくださった皆様のおかげで、こうして無事留学を終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

“Out of comfort zone”

アメリカ留学はこれまでの殻を破る大きなものとなりました。日本にいた頃、私は、失敗することを恐れ、与えられたことをこなすだけでした。しかし、いざ親善大使として選ばれアメリカに来たからには、「留学先での恥は掻き捨て」だと思い、何でも尋ね、積極的にものごとに関わろうと決めました。

“Out of comfort zone.”これは秋学期が始まる前、新入生を対象としたセミナーで教授から頂いたアドバイスです。「居心地の良い場所から抜け出して挑戦すること」。この助言は私の胸に大きく響きました。「居心地の良い場所」、これは単に母国のことを意味するものではありません。アメリカにいても、同じ母国語を持つ人達といつも一緒に過ごしていれば、それは居心地の良い場所なのです。そこで私は、極力日本人ばかりと過ごすことのないよう気をつけました。

どんどん外へ出て行って、授業以外にもたくさん学ぼう。そう考えた私はまず、日本では経験の少なかったボランティア活動に取り組むことにしました。これは日本を全く知らないアメリカ人学生と知り合う良い機会でもあり、彼らに日本のことを説明する過程で異文化コミュニケーション能力や英語力の向上にも繋がりました。

次に、日本語を教えるという活動に多く携わりました。元気キッズの活動で週に2回子どもたちに日本語を教えた他、酪農学園大学へ研究で行かれるアメリカ人の教授に日本語会話を教えたり、日本語専攻の学生のチューターなどを務めたりしました。これらの活動は私にとって初めてのことで、困難も多々ありましたが、どうすれば最善かを試行錯誤しながら取り組みました。

また、埼玉親善大使の方と共に取り組んだ、学長・市長・前学長へのインタビュー、対談集作成も本当に思い切った試みだったと思います。非常に大変な作業でしたが、輝く二人の女性リーダーに加え、福井県にゆかりのあるフリード前学長とお話する機会を持つことができたことを光栄に思っています。インタビュー能力に関しては至らない点もありますが、私たちにしか出来ないものが出来たと思っています。どうぞ一読ください。

この10ヶ月間、非常に充実した毎日を過ごすことができました。この期間で様々な人やもの、考え方や価値観に出会い、多くのことを学ぶことができましたし、私自身も人間として確実に成長できたと感じます。このような貴重な機会を本当にありがとうございました。

―埼玉・福井親善大使企画― オハイオ州・フインドレー・インタビュ―

一、はじめに

本レポートは、埼玉県、福井県の親善大使によるオハイオ州・フインドレーに関するインタビュ―結果を紹介するものである。フインドレー市長、フインドレー大学長、同大学前学長に対しインタビュ―を行い、留学の意義や三方の生い立ちや様々な経験、仕事等について伺った。主な読者を埼玉県、福井県の高校生と想定し、両県の留学奨学金制度、また留学そのものの興味・関心の向上を目的とする。

インタビュアー..

曾根友也

埼玉県出身。埼玉県・オハイオ州スカラシップ(総合系)平成二十五年度奨学生。慶應義塾大学法学部政治学科三年。

河上直子

福井県出身。

フインドレー大学・福井県平成二十五年度奨学生。大阪大学外国語学部外国語学科三年。

二、インタビュ―

キャサリン・ロー・フェル

フインドレー大学学長



アメリカ南部のアーカンソー州出身。

キング牧師を筆頭とした公民権運動の真只中に生まれた。二十四年間勤めたルイジアナ州のセンテナリー大学で准教授と副学長を経験。後、オハイオ州フインドレー大学で現在学長として四年目。同大学史上初の女性学長。「二〇一一年 Ohio Diversity and Leadership Conference」においてオハイオで最も影響力のある女性」として選出される。テキサスA & M大学英語博士号取得。

1

まず、私たちのように若いうちから留学することについてどうお考えですか。

留学は教育にとって不可欠なものだと思います。海外で勉強した学生たちは、自身が国際社会の一員であると感じるとともに、その経験が人生を変えたと言ってくれます。

2

現在二十六カ国から三百名を超える留学生がフインドレー大学で学んでいます。フインドレーの留学生受け入れ状況についてどうお考えですか。

3

留学生を対象とした英語集中プログラム

*HELPプログラム:

す。これは本当に重要な役割だと感じます。さらには教職員も学生の留学を後押しするよう取り組んでいます。

フインドレー大学の異文化交流プログラムはこの大学の強みの一つだと思います。留学生は英語を学んだり異文化に触れたりすることが出来ます。では、アメリカ人学生にとって留学生と交流することのメリットは何だとお考えですか。

私たちはこれまで多くの留学生を受け入れてきました。私はその取り組みの歴史を誇りに思っていますし、これからさらに留学生の受け入れを強化していきたいと考えます。私たちは*HELPプログラムを実施し、英語を学びたい留学生の支援をしてきましたし、これからも続けていきます。また、アメリカ人学生が留学生とより親密な関係を気づくこと、さらにはアメリカを出て海外で勉強することとを可能にするため、努力しています。

留学生との交流により、アメリカ人学生も自らとは異なる人々に対しより心を開くことができるようになりますし、それはフインドレーの学生含む教養人として本当に重要なことだと考えます。また、アメリカ人学生も留学生と同じかそれ以上に多くのことを学びます。こうした交流により、ときに国籍や人種の違いがあるからこそ私たちは面白いと感じ、しかし同時に、同じ人間であるという共通性が「違い」を超えた友達として私た

ちを結び付けてくれるのです。

これまで、海外で学ぶことやフインドレー大学の留学生受け入れ状況についてお聞きしました。若いうちに留学することや異文化交流を経験することの意義を私たちは身を以て感じています。このような素晴らしい機会を学生のうちに頂けて本当に感謝しております。

4

さて、今度は視点を変えて、フェル学長の若い頃についてお聞きしたいと思います。フェル学長がアーカンソーでお生まれになった頃は、キング牧師を筆頭とした公民権運動が盛んでした。ご自身の家庭環境や学生時代について教えて下さい。

家庭によっては黒人、白人両コミュニティで差別意識がありました。しかし、私の家庭では黒人へのそうした意識は全くありませんでした。黒人、白人、それぞれの学校のアイデンティティーや誇りが互いに入り混じる状態でしたが、彼らの亀裂がなくなるまでには長い時間が必要でした。私が所属していた大学の合唱クラブで

は黒人の学生も歓迎されましたが、いくつかの白人専用の教会では私たちは歌うことができませんでした。しかし年月を経て、多くの白人専用教会も私たちのクラブを歓迎するようになりました。現在でもそうであることを願っています。

5

このインタビューは県の高校生を主な対象としております。フェル学長の高校生活について詳しく教えて下さい。

私の高校は非常に小規模で、設備もそれほど充実したものではありませんでしたが、素晴らしい先生方に恵まれました。そのおかげで大学入試にも十分に備えることができました。私は高校生のころも、大学入学後もよく勉強しましたし、バスケットボールやチャアリーディングにも力を入れ、非常に活発な学生生活を送っていました。

6

キング牧師の「私には夢がある」という有名な演説から五十年が経ちましたが、未だにアフリカ系アメリカ人に対する差別は残っています。この問

題について当時、印象的だったことを教えて下さい。また差別問題の現状についてどうお考えですか。

私には高校の頃、よく一緒に遊ぶ黒人の友達がたくさんおり、それは非常によい思い出でありよい経験でもあります。世界中に未だ人種差別があることは確かです。人種問題に関して私たちは時間をかけて進歩を遂げてきましたが、やはりまだまだしなければならぬことはたくさんあります。これは何もアフリカ系アメリカ人についてだけではありません。すべての人種の関係を考えなければなりません。よくアメリカが「人種のつぼ」と言われるようにアメリカにはすべての人種がいます。差別問題は国家間ではなく個人間の問題として捉えられるべきです。だからこそ個人同士がいかに厚い友情を築けるかが重要なのです。私は人種間の融和を妨げる本当の敵は教育の欠如にあると思います。ですから、フインドレー大学は国籍や宗教、またラテン系、黒人、アジア系、人種に関わらずより多くのアメリカ市民を歓迎しています。

7

英語専攻で博士号を取得された後、フェル学長は教育の道に進まれ、センテナリー大学で二十四年間教育に携わっていらつしやいました。なぜ教育の道に進もうと考えたのですか。

教育の道に進むことになったきっかけは、大学一年生の一学期に履修したスピーチの授業です。緊張もしましたが、なにより話すことが非常に面白かったため、教育の道に進もうと思いました。大学においても出会った先生方はすばらしい方ばかりで、私にとつて適したとても落ち着ける環境でした。

8

センテナリー大学で*Interdisciplinary専攻の設立に貢献されたと聞いていますが、これはどのようなことを学ぶ専攻なのですか。

* Interdisciplinary:

「複数の学問領域に関わる研究をすること。学際的。」(スーパード辞林 3.0 「インターディシプリナリー」)

私が設立に携わった Interdisciplinary 専攻はコミュニケーションの領域の一部です。英語専攻というよりもっと

幅広い専攻です。映画や芸術、ビジュアル・アート、グラフィック・デザイン等様々で、大学の中でも重要な学部であるべきものです。その専攻は現在でもセンテナリー大学で非常に重要な位置付けとなっています。

9

Interdisciplinary 専攻を設立する際、何か困難はありましたか。

もちろん大変でした。私たちはその専攻の設立のために大学や学部の関係者を説得する必要がありました。大学のような学問的なコミュニティでは大きな変革を嫌うのです。しかし、その設立によって学生に素晴らしい教育を与えることが可能になるし、さらにはその利益が大学にも返ってくると考えました。また学生数も増えるだろうと思ったのです。そして批判をされることもありましたが、最後には現実のものとなりました。

10

大学への学問的貢献に加え、資金運用部長、開発部長としても活躍されたと伺っています。資金集めのためにどのようなことをされたのですか。

また、成功の秘訣は何でしたか。

資金調達部門に自ら希望して関わったことはありませんでした。しかしあるとき、資金調達企画の手伝いを頼まれたことがあり、それに関わるうちにやりがいや面白さに気付いていきました。資金調達の成功の秘訣は同じ信念を共有する人々を見つけ、彼らと強力な関係を築き、そしてそうした人々を支援の対象となる学生と結びつけることです。こうしたことに私は強い魅力を感じました。



約二十五年に渡りセンテナリー大学でキャリアを積んだ後、フィンドレー

大学の学長に就任することとなりました。前大学はアメリカ南部のルイジアナ州にあるので、フィンドレーとは違った雰囲気があったのではないかと思います。

11

では、フィンドレー大学の第一印象を教えてください。

新しいことに積極的に取り組む、革新的でまさに成長していく大学だと感じました。またフィンドレー大学が様々な宗教を尊重し、学生の知的好奇心に対して真剣に応える姿勢にも感銘を受けました。皆が同じ宗教を信じる必要はありませんが、それぞれの信仰を尊重することが大切です。これはフィンドレー大学の強みであり、私がこれからも守りたいことです。

12

フィンドレー大学の学長に就任したとき、学長としての目標は何でしたか。

フィンドレー大学を博愛の精神に満ちた国際社会と結びつけ、より魅力的で競争力のある大学にすることです。

す。今もこの大学がどの分野においても秀でた存在であること、社会に役立つ教育を与えられることを目標とし、達成に向けて努力しています。

13

就任以来、学長としてフィンドレー大学のために日々努力をされていることと思います。しかし、私たち学生には学長の普段の仕事はなかなか想像しづらいです。毎日どのような活動をされているのか教えてください。

毎日が楽しいです。たくさんメールに対応したり、記事を書いたり事務的な仕事もありますが、学長として過ごす時間の半分は、地域のリーダーや大学の卒業生、国内外の友人とのさらなる関係づくりに充てています。フィンドレー大学の評価向上に努め、こうしたことが、より多くの優秀な学生や大学への支援の獲得につながると考えています。

14

学長に就任されて今年で四年目になります。今まで何か困難はありましたか。

一番大きな困難と言えば時間の使い方でしょうか。限られた時間をどう使うのが最善か。複数の可能な選択肢の中からどれを選ぶか決めるのは難しいことです。これが唯一の困難と言えるかもしれませんが、この大学で学長を務めていて何かに失望や後悔を感じたことは一度もありません。大学の未来も非常に明るいものだと思います。

15
困難を克服する秘訣は何だと思えますか。

それは自分自身であり続けること、そして信念を曲げず、大学にとつての理想の姿をイメージし続けることです。さらに、いかなるリーダーも部下を信頼できなければならぬと思っています。私は彼らに厚い信頼を置いています。彼らもそれに応えてくれていると感じます。

16
では、ここからは違った視点からお話を伺いたいと思います。学長二〇一一年に「オハイオで最も影響力のある女性」として表彰されています。この

受賞はフインドレー大学初の女性学長としての功績によるものだと思います。大学初の女性学長であるという点についてどうお考えですか。

特に女性だからという点で変わったことはありません。私は、良いリーダーである限りは男性であつても女性であつても特に問題はないと思っています。ただ学長が女性である点是人々の関心を引くことだという自覚はありますが、差支えなく思うように仕事ができています。

17
特に日本では、女性の社会進出の低さが問題となっています。アメリカも同じ問題を抱えていると思います。が、この問題についてどうお考えですか。

意思決定の際には、男女問わない意見が必要です。そのため、女性が育児休暇を申し出ることはいっしょに構いません。たとえそれが男性であつても、私は喜んで受け入れます。その貴重な人生経験は人間性を豊かにしてくれますし、私はそのような方々と共に働きたいです。ですから

家庭を持つことは仕事上何の妨げにもなりません。

18
大学と地域は密接に結びついていると思います。フインドレー大学は地域にとつてどのような存在であるべきだと考えますか。

フインドレー大学は地域に優れた人材を輩出し、地域や企業を引っ張っていかなければなりません。互いに協力して問題を解決する存在であるべきだと考えています。

19
最後に、今回のインタビューの主な対象である日本の高校生含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

今いる場所から出て広い世界を見てみて下さい。もし私たちに皆さんの世界を広げる手助けができるなら、私たちフインドレー大学は皆さんを大いに歓迎します。





アメリカ南部テネシー州出身。ウエストポイント（アメリカ合衆国陸軍士官学校）を卒業後、進駐軍の将校として福井県に滞在。退役後は、七年間フインドレー大学長を務める傍ら二〇〇五年に福井県との奨学生制度を創設。

1

まず、フリード前学長の若者時代についてお聞きしたいと思います。今回のインタビューの主な対象が県内の高校生ですので、高校生活について教えて下さい。

私は農場で育ったので、私の高校生活は他の人とは少し変わったものでした。毎朝四時に起きて搾乳や家畜の世話をしました。一方で、私の家では食事のときにアメリカで何が起きているか、何が問題か等について話すようなこともありました。特に母は文学に深い理解があり、またラテン語も堪能でした。もし子どもが何かを巡って争っていたら、私の母ならシェイクスピアからの引用を使って諭すでしょう。私の祖母もまた単なる農場生活とは違う側面を与えてくれたように思います。例えば、彼女は私に聖歌を覚えさせようとしていました。一曲覚えると「ペニー（二円）もらえたのでした。ある日、百五十曲中の十三曲にミスをしてしまったとき（つまり九十二％は正解）、祖母から「あなたの人生は九十二％でいいの？」と言われたこともありました。こうした生活でしたので、農場での生活、仕事と、それ

とは異なる要素が入り混じった環境だったと思います。

2

フリード前学長は、ウエストポイントに入学され、第二次世界大戦終戦の九か月後までおられました。いつウエストポイントに入学しようと決意されましたか。

当時は高校時代が大体の人が入隊する時期でした。私は陸軍学校と海軍学校の両方に申請しましたが、おそらく制服が陸軍の方がかっこよかったのでそちらを選びました。十六歳のときにウエストポイントへの進学を決意しました。私の出生証明書に何か間違いがあったかどうか定かではありませんが、おそらくそれに表示されている年齢よりも実際は若かったと思います。私は農家出身で家のベッドの上で生まれました。担当した医者が出生証明書の記載を誤ったのだと思います。これによって実際はおそらく正規の年齢に満たなかったにも関わらず、ウエストポイントに進学することができました。

3

なぜ軍隊に入ろうと思ったのですか。

直感的なものだったと思います。士官候補生というのは全米から集まってくるもので、高い評価を得ていた地位でした。私自身、人生の中で軍隊に入らなければとは考えていませんでしたが、ある種の私のしたいことだったのだと思います。

4

ウエストポイントでは主に何を学び、どんな学生生活でしたか。

私は有意義な時間を過ごせたと思っています。本来肯定的に捉えられるべきものではないですし、むしろそこで過ごした苦しい時間のことを伝えたい人も多いでしょう。しかし私はそうは思いません。そこにははつきりとした上下関係があり、私はそれを気に入っていました。学問としては、芸術や文学を学びそれらは科学志向の強いもので、工学専攻に近かったと思います。

5

今度は、ウエストポイント卒業後のご

自身について伺います。卒業後23年間に渡り米軍に献身されました。日本の福井県はじめ、数か国に滞在したことがあると聞いています。卒業直後日本に来られたそうですが、訪日がどのように決定され、日本で何をしたのか、また目的等を教えて下さい。

法で生産していたのです。そして第二次大戦の数年後、日本は事実上国家として破綻しましたが、1年ごとに少しずつ進歩するどころか20年分急速に成長を遂げたのです。

日本では、各市町村を訪れ、その長や警察署長に日々何が起きているか尋ねて回りました。私は特に大津や福井で大半を過ごし、人口五百人ほどの小さな村をたくさん訪問しました。十分な食料があるかといった非常に現実的な質問もしました。幸い天候に恵まれ、農作物の生産基盤も整っていました。家畜が不足していません。すべて食べ尽くしてしまっていたからです。ですからテネシーに住む私の母から卵を送ってもらい、私はそれを孵化させ養鶏したのです。当時出会った日本人は、抱えている問題については何も文句を言わず、どうすれば彼らの、そして彼らの子どもたちの生活を改善できるかだけを考えていました。極貧の時代でしたが、私はそうした日本人の姿に強い感銘を受けました。

6

日本滞在についてさらに質問させて

ください。フリード前学長が日本におられたときの年齢は、今の私たち（二十一歳）の年齢と全く同じです。私たちには前学長がそこでどんなことを感じ、考えていたのか、なかなか想像が付きません。日々考えていたことを教えて下さい。

主に考えていたことは、私たちが人々を救うために何ができるかということです。しかし、この考え方は、当時日本にいた米兵皆が抱いていたものではありません。中には、もしロシアが侵攻してきたらどう対処するかということをもっと考えている人々もいました。米軍はその場合に備える必要があったのです。マッカーサー元帥に導かれたアメリカの一般的な考えは、出来るだけ早い日本の再建を手助けするということだったと思います。

7

日本滞在を通じて最も印象深い出来事は何でしたか。

壊滅状態にあった日本が急速に発展を遂げたことです。日本人の賢明さ、素晴らしいアイデアによって急速に成

長しました。人々は難題の解決のために毎日遅くまで働きました。日本は天然資源が限られていましたし、山が多く、平らな土地があまりありません。そうした中でも資源を最大限に活かしていました。また家畜もほとんど失った状態で、人口に見合う食料を供給する必要もありました。日本人が行った賢い策の一つは、家畜の牛を食料としてではなく、農作業などに活用したことです。こうした人々の高い能力、様々な工夫や努力によって、日本は窮地から脱したのです。

8

フリード前学長が日本におられたときから六十五年以上が経ちました。今振り返ってみると、日本での経験はこれまでの人生にどのような影響を与えましたか。

日本滞在によって、人間はときに何かを迫られてやる方が、そうでないときよりも良い成果をあげられるという考えを得られたと思います。例えば、当時の日本人は戦争によってどん底の状態にありました。人生においてそうした状況に直面すること

は多々あります。しかし私たちはそれをチャンスとは捉えず、活かそうとしません。たとえ完全には克服できなかったり、改善できなかったりしても、ある程度得たかったものが得られれば、さらなる向上は目指さず、やめてしまうのです。何年も後のことです。私がカンザス大学で日本人と困難な課題に取り組んでいたとき、彼はいつも桁外れに素晴らしい提案、アイデアをくれたことをよく覚えています。



フリード前学長は、軍人として長いキャリアを積んだ後、マウントユニオン大学で学部長に就任されました。

9
なぜ教育の道に進もうと考えたのですか。

妻の影響が大きかったのだと思います。様々な国に駐在している間、残りの軍人生活について考えていました。私も妻も教育は公共サービスであり、それに重要な価値を見出していたので、教育の道に進むことを決めました。

10
フィンドレー大学は教育におけるキャリアの中で最後の機関となりましたが、学長としての目標はどんなものだったか。

特に明確な目標を定めていたわけではありませんが、全ての人と家族のように共に仕事をしました。大学の運営において、教職員に方向性を伝える際、言葉で伝えることなく、彼らをやる気にさせることが重要です。本当に必要なのは、そのチームの皆が

共通の必要性を持つ課題に取り組むことです。教職員の立場を尊重し、適切な距離を取りつつも彼らを助けることが重要です。

11
現在二十六カ国から三百名を超える留学生がフィンドレー大学で学んでいます。フィンドレー大学は豊かなダイバーシティーに恵まれ、フリード前学長は奨学生制度の設立にも携わりました。では、異文化理解についてどうお考えですか。

人々はおもつと異文化理解に努めるべきだと思います。私たちの視野を広げるだけでなく、歴史的な視点から物事を見ることができるようになります。また留学を経験した学生が母国に帰る際には、来たときと異なったアメリカに対する見解を持っていると思うのです。ある国について知るためには、その国で暮らすことに取って代わるものはないと考えます。私は妻と様々な国での生活を経験しましたが、例えば外交官としてイランに滞在していた際、妻はなんとペルシャ語を学んだのです。またドイツでは、他の外交官の方々より十歳ほど若

く、給料も毎月百二十五ドルとあまり高くありませんでしたが、私もそのでの生活を楽しみました。さらに、チエスロバキアの交響楽団の演奏会を手伝ったり、ドイツの交響楽団の再生にも手を貸したりして、職にあぶれた人のために雇用を生み出しました。

12
留学生として私たちは日々英語を学び、異文化に触れ、多くのことを学んでいます。ではアメリカ人学生にとって留学生と交流することのメリットは何だとお考えですか。

アメリカ人学生にとつても、異文化交流の重要性は以前よりはるかに増してきています。なぜなら、私たちは今、国際化が進む社会に生きているからです。育った環境が考えれば考え方も異なってきます。しかし根本的なところでは、人々は皆人間として多くの部分を共有しています。現在、フィンドレー大学の留学生数は増えてきていますし、フィンドレー地域に関しても同じことが言えます。

「引退」というものはないのだと以前おっしゃっていたように、フリード前学長は交響楽団や病院の理事など、依然フインドレー地域の活動に携わっていらつしやいます。それでは、コミュニティにとつてのフインドレー大学はどうあるべきだとお考えですか。

をとれるような、また今後人々を引っ張っていけるような存在だと思えます。そうした多くの優秀な学生を私たちは必要としています。実際に、以前フインドレー大学に留学した学生は、母国に戻ってからもうあらゆる分野で活躍しています。加えて、現在、フインドレー大学はアメリカ人学生の日本留学も促進しています。

フインドレー大学は、人文科学や自然科学などにおける教育の充実を図り、また学生の雇用支援をすることでコミュニティの発展に貢献すべきです。私たちは、特に日本企業がフインドレーに事業展開するための手助けをしてきましたし、そのためにあらゆる困難も乗り越えてきました。

最後に、今回のインタビューの主な対象である日本の高校生を含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

高校生の段階で異文化交流を経験することは非常に重要だと考えますし、これからもそうした交流は広がっていくと思います。留学を経験するような学生はすでにリーダーシップ



リディア・ミハリック

フインドレー市長



アメリカ中西部のインディアナ州出身。二〇一二年よりフインドレー市初の女性市長。二児の母でもある。過去二度来日。洪水対策と雇用創出に特に熱心に取り組んでいる。フインドレー大学政治科学士取得。

ご自身の家庭環境や学生時代について教えていただけますか。

私はインディアナ州のフインドレーよりも小さな町の農家に生まれ、周りの友人と何ら変わりない幼少期を過ごしました。高校生の頃、私は勉強に非常に熱心でしたが、スポーツにも取り組んでいました。フインドレー大学では、バスケットボールのおかげで奨学金ももらっていました。

大学では政治科学部に所属されていましたが、なぜ政治に興味を持ったのですか。

私は数学や理科が大好きでしたが、それ以上に中学生の頃から政治に興味がありました。そのころから、アメリカや世界で起こった出来事を書き留めていて、それらのことに非常に関心があったのを覚えています。そのため大学でも政治を学びたいと思ったのです。さらに大学一年生のときの政治学の授業で、大統領選挙を自分たちで真似たことがあったのですが、

大統領を選挙する*選挙人団投票の過程が本当に面白かったのです。私は幼いながらも、政治を通じた人々の交流を観察することや公共の福祉を追求することに興味がありました。さらに、宗教や教育など過去の経験によつて変わる政治への考え方、意思決定を知ることがとても面白かったです。そしてそれらは今もなお変わりません。

*選挙人団投票…

アメリカ大統領選挙では国民（一般有権者）は州ごとに選挙人団（公職の候補者を選出することのできる選挙人の団体）を選び、その選挙人団が大統領を選ぶ。（ブリタニカ国際大百科事典）

3

今私たちは、フインドレー大学で学部生として授業の他にも多くのことを学んでいます。ミハリック市長が大学生の頃は、政治系のクラブやバスケットボールクラブにも所属されていたとお聞きしています。文武両道は大変だったのではないかと思います。が、大学生活はどんなものでしたか。

私はいろいろな活動に関わっていましたが大変ではありませんでした。バスケットボールももちろん大学生活の重要な点でしたが、大学は学問を追究する場だと考えていました。大切なのは両者のバランスを上手にとることです。大学生活で身につけた物事のバランスをうまくとる能力は今の仕事や私生活にも生かされています。

4

大学在学中、最も思い出深いことは何ですか。

大学生活で築いたクラスメイトや先生方との人間関係です。入学当初、フインドレー大学は私にとって単に居心地のよい場所でした。しかし卒業するときにあって、この大学が非常に実り多い場所であったことに気づいたのです。大学で人々との交流や学問を通じて素晴らしい経験をできました。このような素敵な思い出ができ、また素晴らしい人々に会うことができたのも、フインドレーが特別な場所だからです。フインドレーの人々は思いやりに溢れていて寛大で友好的です。

では、次に留学とダイバーシティについてお聞きしたいと思います。

5

現在二十六カ国から三百名を超える留学生がフインドレー大学で学んでいます。私たちは日々様々な異文化交流をする中でお互いに多くのことを学んでいます。ミハリック市長が学生の頃にもこういった異文化交流の経験がありましたか。

大学入学以前はそうした経験はほとんどありませんでしたが、大学在学中は様々な異文化交流を経験しました。それは私にとって単に知らない世界であっただけで、全く怖気づくことはありませんでした。異文化交流には価値を見出さない人もいますが、私は、それを通じて多くのことを知ることができると思います。そしてその経験が、新しいものや人に会うのが好きで先入観を抱かない今の私を形作っているのだと思います。高校生の頃、私の姉がよく世界は広大で外国には経験したこともないようなことがたくさんあるのだと言っていました。どんなビジネスや団体も多種多様な考え方が必要であり、フインドレー大

学にはその基盤があつたように思います。

6

私たちのように、若いうちに留学することについてどうお考えですか。

若いうちに留学をするのは素晴らしいことだと思います。様々な考え方や異文化に触れて多様な価値観を知ること、居心地の良い環境だけで過ごした人よりもはるかに広い視野を持った優れた人になることができると思います。

私の子どもたちにもぜひ留学を勧めたいと思っています。日本を訪れた際、二人は幼いながらも日本の文化、歴史あらゆるものに興味を抱き、まるでスポンジのように何事も吸収し、学んでいました。

7

また、フインドレー市民のほとんどは白人ですが、ヒスパニックやアジア系などの人々も暮らしています。ミハリック市長はフインドレー市のダイバーシティについてどうお考えですか。

さらなる多様化を望んでいますし、

多様化しつづけていると思います。多種多様な人々が同じ街で暮らし様々な考え方を知れば、金銭的ではなく人間的に豊かな人になることができます。フィンドレー市の企業が国際化に取り組んでいるのもそのためです。ここにはフィンドレー大学がありますし、フィンドレー大学は目新しい取り組みを行っています。若い人をフィンドレーにひきつけることができればさらなる多様化が見込めるでしょう。



では、違った視点から質問させて下さい。女性市長としての仕事について伺います。ご存じのとおり、特に日本で

は女性の社会進出の低さが問題となっています。アメリカも同じ問題を抱えていると思います。こうした現状のなかで、二〇一二年にフィンドレー市初の女性市長になりました。市長に当選された直前には、女性だけを対象としたジョアン・デイビッドソン・リーダーシップ研究所で学ばれています。

8

なぜこうした機関で学ぼうと決めたのですか。また、主にどんなことを勉強されましたか。

ジョアン・デイビッドソン・リーダーシップ研究所は、有能な女性リーダーを育成し、政治決定の場により多くの女性を参加させることを主な目的とした機関です。また州や地域レベルで社会に貢献できる女性を増やすことも重要視されます。コミュニティにとつてダイバーシティを持つことは重要です。女性の視点も加わることで豊かな対話や交流が生まれ、ものがよりうまく進むと思います。だからこそ女性の政治参加や重職への登用が求められるのです。私はこの機関で自信を持つことができるよう

になりましたし、インタビューやプレゼンテーション能力の向上、地方・州関係への理解に役立ったと思います。

最近では改善されてきたように思いますが、日本にも同じような問題があると思います。男性がお金を稼ぎ、女性はそれを支える。しかしこれが正しいとは思いません。女性も男性と同じように仕事をし、金銭面でも家庭を支えることができます。私は仕事をする中で、多くの会議に出席しますが、大抵その場唯一の女性です。だからと言って特別なことはありません。「ただやるだけ」です。多くの女性に必要なのは強い信念です。本当に成し遂げたいことがあるならただそれを掴みに行けば良いのです。社会の目、風潮など気にせず挑戦し、それを達成するだけです。そしてそれを達成できたときは最高でしょう。

9

なぜ市長選への出馬を決めたのですか。

市長に就任する前は地域経済開発部で十年間ほど働いていました。仕事の内容上私は財政に携わることが多

かったですが、私はそのとき、その部のリーダーシップの欠如に悩まされていた。当時私は弱冠三十一歳でしたが、既に十分な知識と経験を積み、どのように市政が動いているか理解していました。そして私ならフィンドレー市に貢献できると思ったのです。加えて、私は市の未来を不安に思っていました。強いリーダーシップを欠き、はつきりとした道筋がないままではより良い街を築くことはできません。このリーダーシップの問題を解決するため、自らの出馬を決めたのです。実際に最近二年間でフィンドレー市は躍進を遂げました。今まで市長としての役割を十分に果たしてこられたと感じています。

10

フィンドレー市初の女性市長であることについてどうお考えですか。何か特別な想いがありますか。

市長のような重要な役職には重い責任が付きものですが、私は自分が初の女性市長であることを嬉しく思いますし、その仕事に誇りを持っています。ただ、他の男性職員と自らを区別するようなことはありません。私にとつ

て、例えば小学校を訪問して、子どもたちから「市長さんって女の人の人なの!」、「じゃあうちのお母さんも市長さんになれるのかも!」といったことを聞けることほどうれしいことはありません。

11

ミハリック市長は市長でありながら、二児の母でもあります。母として、妻として、市長として日々過ごす中で、やはりここでも重要なのはバランスをどうとるかでしょいか。

最近子どもたちも大きくなってきた以前よりも大変です。私の仕事のこと、今日誰と会ったか、どんな問題があるかなど知れたがるのです。いつも「なんで?なんで?なんで?」と聞いてきます。しかしもちろん何の問題もありません。私は素晴らしい夫に恵まれました。いつもお互いに支え合っています。仕事と家庭の両立で大事なものはバランスだと思います。私たちはこれを本当に重要だと考え、仕事の時間と家族との時間をきちんと区別し、どちらも大切にしています。そうすることですぐうまく両立できていると思います。

12

次の市長選も来年と近づいていきます。振り返ったとき、フィンドレー市長として何か困難がありましたか。

私が市長になった当初、フィンドレー市には前市長から引き継いだ約四百万ドル(四億円)の負債がありました。この財政赤字の原因にはまたしてもリーダーシップの問題があったと思います。この負債への対処のため一昨年から昨年にかけて、私は多くの難しい決断を迫られました。毎日夜遅くまで仕事をしなければなりませんでした。ですから、最初の二年間は困難も多かったのですが、市民のために共に働く素晴らしい同僚に恵まれ、最近六か月ほどは財政も上向いてきたと思います。これまで市長として多くの課題に取り組み、よい成果をあげてきたと思いますし、これからもそうあり続けたいです。

13

それでは、ミハリック市長の今の夢は何ですか。

私の夢はこれからも長い間フィンドレー

ー市長として最高の喜びを感じ続けることです。だからこそ、フィンドレーを最高の場所にするのを私の目標としたのです。市民がどこか他の場所に行ってしまうようになったら、そのときは市長として身を引くときだと思っています。しかし人々がここに居続けたいと思う限り私は嬉しいです。私はフィンドレーにいて、この場所をよくできればそれで幸せです。

14

最後に、今回のインタビューの主な対象である日本の高校生を含め、未来の世代に向けてメッセージをお願いします。

今学べるだけ学んでください。常に新しい、面白いことに心を開いてください。好機はきつと訪れます。そして世界は皆さんの目の前に広がるでしょう。自信に満ちた、寛容な人であれば、成し遂げられないことは何もないと思います。ときには恐ろしく感じることもあるでしょうが、チャンスは無限にあるはずですよ。日本にだって必ずあるでしょう。自分の「星」を掴んで下さい。鍛錬を重ね、強い意志を持てば必ず成し遂げられます。

どこへ行っても、努力すれば大丈夫です。



三、編集後記

〓曾根友也〓

何か形に残るもので埼玉県とオハイオ州の親善に貢献したい。特に私たちと同じ若い世代に留学の意義を伝え、関心を持つてほしい。こうした想いでこの企画を立ち上げました。本レポートは、三方へのインタビュー依頼と日程調整、事前調査、質問作成、インタビュー、録音データの文字起こし、要点の確定、翻訳、編集という過程を経て完成しました。授業やその他様々な活動の合間を縫って作成し、三ヶ月程かかりました。大学や市、三方についてのより深い理解はもちろん、英語でのインタビューの仕方学ぶことができました。

全てのインタビューを終えた今、強く感じることは、留学が本当に価値あるものだということです。三方全員がその価値を認め、必要性を強調していたように思います。私は異文化交流を通じて人々の世界観は大きく変わると 생각합니다。昨今グローバル化が叫ばれ、そうした社会において国際交流・理解は不可欠だということを頻繁に耳にします。無論、これを否定するつもりはありませんが、私

が素直にまず思うのはもつと単純なことです。それは、世界にいる様々な面白い、素敵な人々に会わないのはもつたいないということです。人種や国籍、言語等が異なる人々に出会い、様々な考えに触れ、何かを感じ、学ぶことは自分の価値観や考え方を变え、人生を豊かにすると思います。自分だけでは気付かなかったことや見えなかったことを知り、成長できると思っています。

フインドレー大学や市を牽引している三方によつて語られた言葉を通じて、また私たちのインタビューへの挑戦そのものによつて何かを感じていただけたら幸いです。埼玉県とオハイオ州を繋ぐ「草の根親善大使」として、少しでもその関係の向上に貢献できたことを願います。

〓河上直子〓

埼玉親善大使の曾根君によつて企画されたこのインタビューは、私たちが受けている奨学金制度や留学そのものについて、両県の高校生への情報発信を目的としました。しかし、私たちにはインタビューについてのノウハウが全く無く、実際のインタビューを行うまでや、その後の編集作業の一つ一つ

の過程を模索しながらの三ヶ月でした。途中、挫折しそうになることもありましたが、「インターネットで検索可能な情報を掲載するのではなく、私たちにしかできない記事を作成しよう」という思いの基、よりよい記事を作成するために数え切れない程のミーティングを重ね、こうして形にすることができました。

インタビューで最も印象的だったのが、フェル学長の「差別問題は国家間ではなく個人間の問題として捉えられるべきである」という言葉です。この言葉は、人種差別をはじめとする、様々な差別や偏見などの根絶にも多くの共通性を持つものだと思います。実際、私が留学以前抱いていた特定の国や地域に対する固定観念が、この十ヶ月間で彼らと深い友人関係を築く過程でなくなつていったことを思うと、まさにこの言葉を身をもつて体験できたように思います。個人では解決が難しく思える問題も、まずは些細な一歩から始まるものなのだと気づきました。

留学は決して言語的なメリットだけではなくありません。様々な価値観に触れ、今まで気付かなかったものの見

方・考え方を知ること、広い視野を持つことができるようになると思います。この企画は私たちができる国際貢献へのささやかな一歩ではあります。しかし、点が線になって面になるように、両県の高校生が留学やこの奨学金制度への関心を深めるきっかけとなり、小さな交流が大きな力に繋がればと思います。

